九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

九州大学附属図書館蔵『五轉受仮字大概』解題と翻刻

蛭沼，芽衣
九州大学 ： 専門研究員

門屋，飛央
福井工業高等専門学校 ： 助教

藤田，優子
九州大学大学院 ： 博士後期課程

高須，芳之介
九州大学大学院 ： 修士課程

他

https://doi.org/10.15017/2547986

出版情報：文獻探究. 56, pp.52-64, 2018-03-31. 文献探究の会
バージョン：
権利関係：

九州大学附属図書館蔵『五轉受仮字大概』解題と翻刻

蛭沼芽衣　門屋飛央　藤田優子
高須芳之介　大宅芙美

解題

日本の活用研究が盛んに行われるようになったのは、江戸時代後期になってからである。本居宣長が『活用言の冊子』に動詞・形容詞を分類し、本居春庭が『詞の八衢』でそれらをさらに整理した。そして義門が『友鏡』でそれぞれの活用形に「第一転未然形」「第二転連用形」「第三転截断言」「第四転連体言」「第五転已然言」と名付けた。本書はこの「五転」それぞれの活用形を「受」ける「仮字」（助詞・助動詞）について、説明したものである。

本書は九州大学附属図書館の音無文庫に所蔵されていて、日本古典籍総合目録データベースによると、この一本しか確認されていないものようである。

奥書には、

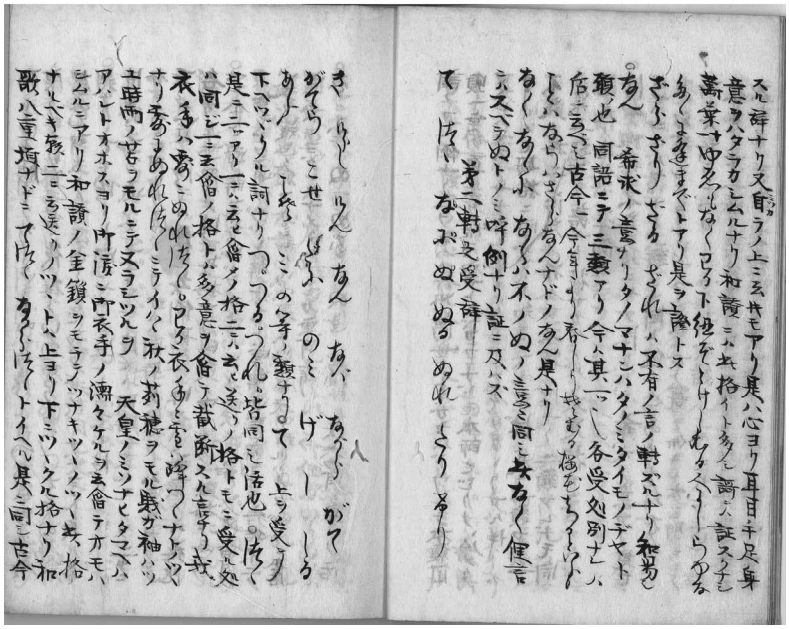
慶応元年仲秋中浣　越之後州　宗麟述誌
慶応二丙寅歳中夏上浣写之畢　摂州象外

とある。この二者についての詳細は不明であるが、本文中の用例に用いている和讃から、浄土真宗の僧侶であることがわかる。

幕末には、国学だけではなく、西洋文典などの影響をうけた、新しい文法研究もおこなわれているが、本書は本文中の用語や、『詞の玉緒』、『活語指南』などの引用があるところから、伝統的な国学の、特に本居学派の諸書を勉強していたもののようである。用例に和讃を多く挙げている（後述）のは、一方でこの文法研究が和讃の理解のためのものであったとも考えられる。

第一転から第五転までで扱っている語は次のとおりである。

第一転（未然形接続）：ず（・ぬ・ね）、で、む、じ、まし、ば、ばや、しむ（しめ）、なむ、なく、なくに
第二転（連用形接続）：て、つつ、ぬ、たり、けり、き、なむ、なば、ながら、がて、がてら、こせ、だに、のみ、げ、あふ、きらふ（霧ふ）、こそ、そ



3丁裏　第二転之受辞

第三転（終止形接続）：めり、らむ、べし、らし、かし、と、なり、な（禁止）、な（詠嘆）、まじ、がね（がに）、はた、ばかり、や、よ、て

第四転（連体形接続）：かな、まで、に、を、より、か、が、がに、ばかり、だに、さへ、こと、なべ、から、のみ、ながら、ごと、なり、なむ

第五転（已然形接続）：ば、ど、ども、とも、ばや、や、と、とも（この二つは希求言（命令形）を受ける）

最後に、「体言を受ける辞」として、「せり（せらむ）」が挙げられている。

各転の最初に、当転を受ける語群が掲出されているが、ここと本文の掲出語には異同がある。また掲出語の単位としては、「ず　ぬ　ね」のように、本文中では一類であると説明しつつも、活用による異形態も別個に掲出されることがある。現行の古典文法では、二語にわけられる「たらむ」「けらむ」などが「たり」「けり」などに含まれるなど、当時の語の認識のしかたが窺える。

各項目では、多くの場合、文献から用例を引きながら説明している。使用文献は、万葉集、古今和歌集が多いが、他に、後撰和歌集、拾遺和歌集、新古今和歌集、家持集、源氏物語、和歌八重垣、鰒玉集、和讃を用いている。このうち、一例ずつしかないが、和歌八重垣とは、元禄十三年（一七〇〇）に刊行された有賀長伯の和歌の歌学書で、鰒玉集は文政十一年（一八二八）から安政元年（一八五四）にかけて加納諸平が当代の和歌を集めた歌集である。中古の作品を使用しながら説明するのは、国学書などでもよくされているが、本書ではこのような当代の歌集なども参照している。国学書では、『万葉考』『詞の玉緒』『活語指南』が引用される。

本書の特徴として挙げられるのは、和讃からの引用が多い点であろう。和讃とは、和語によって仏の功徳や先徳の行化を称嘆する讃文のことで、漢語による漢讃、梵語による梵讃に対して作られたものであ

る。本書には、浄土和讃、浄土高僧和讃、正像末法和讃を使用しており、いずれも親鸞の著作である。また、覚如による親鸞の伝記や、蓮如上人御文という、蓮如が書簡形式で書いた法語も使用されている。これらは浄土真宗に深くかかわるものであるところから、本書の著者は浄土真宗に関わる人物であったと推測できる。

多くの掲出語にはその上部に朱の〇や、また一部には朱による中線が引かれている箇所がある。ただしすべてについているわけではないこと、文の途中に付されているところがあることなどから、朱筆の書入れは、宗麟の原本にあったものではなく、書写者である象外、もしくは別人によるものと推察される。

上述したように、国学書や歌学書などの引用から、これらの「てにをは」研究を学習していたようであるが、より詳細に本書の記述と比較することで、本書の系統や影響関係を精査していく必要があるだろう。

凡例

・原文の表記に従ったが、用例の和歌や掲出語は平仮名表記とした。
・掲出語はゴチックで示す。
・句読点、カギ括弧などの記号は、私に付した。ただし、「〇」印は原文のママであり、朱筆によって書き込まれたものである。
・傍線、傍点は原文のままである。朱筆によって差された傍線は破線で示す。
・合字は分けて示す。
・割注は〔　〕で表す。
・（　）は、国歌大鑑番号もしくは丁数を示す。

翻刻

五轉受仮字大概　　越後　宗麟　註

〇第一轉之受辞

ず　ぬ　ね　で　じ　ん　まし　ば　しめ　ざら　ざる　ざり　ざ
れ　なん　ばや　なく　なくに

ナドノ類ナリ。此中**ず　ぬ　ね**ノ三ツハ、一ノ「不」ノ字ノ意ニテ、雅俗別ナシ。委クハ、「ず」ニマク三ツアリ。一ニ将然言ノ格。古今集一ノ「けふこずば明日は雪とぞ降なまし（古今六三）」等と詠ル類ナリ。和讃ニ「イマサズバ」「ヒロメズバ」ナドノ「ズ」コレナリ。二ニ連用言ノ格。古今二ノ「聲絶ずなけや鶯（古今一三二）」の「ず」是ナリ。万葉ニハ「しかずけり」ナドヨメリ。是モ同シ。三ニ截断言。古今一ニ「人はいざこゝろもしらず（古今四二）」ト詠ル「ず」是ナリ。「ユカズ」「皈ラズ」「見ズ」「キカズ」ノ類、ミナ此格ナリ。如是三類アレドモ、ウクルハミナ第一轉ノ言ノミゾ。

ぬ　「不」の連体言ナリ。「ぞ」「の」「や」「何」〔何ト云ハ「なぞ」「なじ」「いかで」「いかでか」「たが」「たれ」「いかに」「いかにして」ナトノ類〕（一オ）ノカヽリヲ結ブトキハ上ノ截断言ノ「ず」ニ同シ。「しらぬ顔」マタハ「見ぬ人」ナト云トキノ「ぬ」ハ、連体言ノ當分ナリ。例セハ古今ニ「くるとあくとめかれぬもの

を（古今四五）」ト詠ル「ぬ」ハ連体言。又「桜花とくちりぬともおもほえす人のこゝそ風吹あへぬ（古今八三）」ト詠ル「ぬ」ハ「ぞ」ノ結ニテ截断言ニ同シ。

○**ね**　「不」ノ已然言ナリ。和賛ニ「イツヽノサハリハナレネバ」ノ「ネ」是ナリ。古今ニ「月みれは千々に物こそ悲しけれわか身ひとつの秋にはあらねど（古今一九三）」ノ「ね」ニ同シ。又「コソ」ノカヽリアレバ、「ネ」ト結フナリ。コノトキハ截断言ニ同シ。古今ノ「色こそみへね（古今四一）」新古今ノ「人こそしらね（新古今九七六）」ナドノ類是ナリ。

○**で**　「ズシテ」ノ約メ言ナリ。古今ノ「寐ても寐でもみへけり大方はうつせみの夢にはありける（古今八三三）」ノ「で」ナトノ類是ナリ。必連用言ナリ。雅言俗言大凡オナジ。（一ウ）

○**じ**　俗言ニハ「まい」ト云例ナリ。是ニ三類アリ。連用言ハ證イマダミズ。截断言ナルハ和賛ノ「一人モアラジ」トノ「ジ」ナドノ類ナリ。「アラジ」ハ「アルマヒ」ナリ。連体言ナルハ古今十八「いくよしもあらじわか身をなそもかくあまのかるもに思ひみたるゝ（古今九三四）」後撰十五ノ「白河の瀧のいとみまほしけれとみたりに人をよせじ物をや（後撰一〇八七）」ナドノ類是ナリ。此格ハ俗言ニハ多ケレト雅文ニハイトスクナシ。

○**ん**　俗言ニ「う」ナリ。是ニ二ツアリ。截断ト連体トナリ。勧章ノ「タノマン衆生」又「マウサントモガラ」等ノ「ン」ハ連体言ナリ。「タノマン」ハ「タノム」、「マウサン」ハ「マウス」ト云コトナト云説ハ依ガタシ。若「マン」ハ「ム」、「サン」ハ「ス」ナラバ、「タノム衆生」「マウス輩」ニテ足ヌベシ。前後ノ文ヲヨミテ知ヌベシ。古今ニ「よそにみてかへらラウナリん人に藤の花はひまつはれよ枝はをるとも（古今一一九）」ト詠ル是也。截断言ナルハ「らん」「なん」「けん」ナトノ「ん」皆同。勧章ノ「人ヤアルラン」トノ類、是ナリ。（二オ）又「め」ト云トキハ已然言、「帰ラメ」「往カメ」ノ類ナリ。「コソ」ノカヽリヲ結トキハ、ヤハリ截断言トナルナリ。活語指南ニ此「ん」連用言ヲカヌトイヘド依ガタシ。今評ヲ略ス。「ん」モ「め」モスベテ物ヲ推察スル語ナリ。「タノマン」ハ「タノマウ」ニテ、俚言ニハ「タノムデアラウ」ト云ホドノ辞ナリ。必「マン」ノ約「ム」ナレハ「タノム」ト云コトナドヽ云ベカラス。御伝記ノ「マウサバコソマコトニオホゲナクモアラメ」ノ「メ」モ今ト同クテ「恐気ナクモアラウズレ」ト推量スルコヽロナリ。

○**まし**　俗言「う」ナリ。「まく」ト云トキハ連用言ナリ。「アラマクホシ」ノ類ナリ。「ましか」ト云トキハ已然言。古今十五「人しれす絶なましかばわひつゝも無名ぞとだにいはまし物を（古今八一〇）」ト詠ル是ナリ。此「絶テシマウタナラバ」ノ意ニテ「絶なましかば」トハイヘリ。「まし」体言に連ナルハ、今ノ「いはまし物を」の「まし」ナリ。截断言ナルハ和讃中ノ「マシ」是也。上ニ不定ノ「バ」ノカヽレルハミナ返リテ（二ウ）調ノフル例ナリ。一ヲ云ハヽ「片州濁世ノトモガラハ、ドウシテ本願円頓一乗ノ真宗ヲ悟ラウ」、サトルベカラネドモ、本師ヒジリノ弘メタマヘレバ、ヤスクサトラルト云ニナルナリ。「こそ」ノカヽリアルトキハ「ましか」モ此格ニ同クナルト知玉フベシ。

ば　是ニ二類アリ。一ニ不定ノ格、二ニ治定ノ格。今ハ不定ノ「ば」ナリ。二類アレドモ同ク承上起下ノ語ナリ。

「花サカバ」の「バ」ハ不定、「花サケバ」ノ「バ」ハ治定ノ格。余ハ準例スベシ。

○**ばや**　次上ノ不定ノ「バ」ニ「ヤ」ノ係タルニテ、希求ノ意アリ。「見セバヤ」「ヲラバヤ」ナドノ類ミナ同シ。但シ「心あてに折ばやをらん初霜のおきまどはせる白菊の花（古今二七七）」ノ哥ノ如キハ少シ別ニテ、「折ラバ折ラレウカ」ノコヽロト辞玉緒ニイヘリ。モトモシカルベシ。

しめ　下二段ノ活語ナガラ、自ラ一類ニキコユル故ニ爰ニ挙グ。「しむる」「しむ」「しむれ」ミナ一類ナリ。常ノ格ハ、他ニオホ（三オ）スル辞ナリ。又自ラノ上ニ云トキモアリ。是ハ心ヨリ耳目手足身意ヲハタラカシムルナリ。和讃ニハ此格イト多シ。謌ニハ証スクナシ。萬葉十一「ゆゑもなくわか下紐ぞとけしむる人にしらゆなたゝに逢まで（万葉二四一三）」トアリ。是ヲ證トス。

ざら　ざり　ざる　ざれ　ハ、「不有」ノ言ノ轉ズルナリ。知易也。

○**なん**　希求ノ意ナリ。「タノマナン」ハ「タノミタイモノヂヤ」ト願ノ也。同語ニテ三類アリ。今ハ其一ツ也。各受処別ナレハ后ニ云ベシ。古今一「今年より春しりそむる桜花ちるといふことはならはさらなん（古今四九）」ナドノ「なん」是ナリ。

なく　なくに　「なく」ハ「不」ノ「ぬ」ノ意ニ同シ。此「なく」俚言ニハスベテ「ぬ」トノミ呼例ナリ。証ニ及ハズ。

第二轉之受辞

て　つゝ　な　に　ぬ　ぬる　ぬれ　たり　けり（三ウ）き　けらしけん　なん　なば　ながら　がて　がてら　こせ　だに　のみ　げし　しる　あふ　こそ　み　の　等ノ類ナリ。○**て**　上ヲ受テ下ヘツヾクル詞ナリ。「つ」「つる」「つれ」皆同シ活也。○**つゝ**　是ニ二ツアリ。一ニハ云ヒ含メノ格、二ニハ云ヒ送リノ格。トモニ受ル処ハ同ジ。一ニ云含ノ格トハ、多意ヲ含テ截断スル言ナリ。「我衣手は露にぬれつゝ（後撰三〇二）」「わか衣手に雪は降つゝ（古今二二）」ナトノ「ツヽ」ナリ。「露にぬれつゝ」ニテイハヽ、秋ノ苅穂ヲモル賤ガ袖ハ、ツユ時雨ノ苦ヲモルニテヌラシツルヲ、天皇ノミソナヒタマヘハ、アハレトオホスヨリ、御涙ニ御衣手ノ濡々ケルヲ、云含テオモハシムルニアリ。和讃ノ「金鎖ヲモチテツナキツヽ」ノ「ツヽ」此格ナルベキ歟。二ニ云送リノ「ツヽ」トハ、上ヨリ下ニツヽクル格ナリ。和歌八重垣ナドニ「てつゝ」「なからつゝ」トイヘル。是ニ同シ。古今（四オ）「物ごとに秋そかなしきもみちつゝうつろひゆくを限りとおもへは（古今一八七）」後撰ノ「いつの間にちりはてぬらん桜花おもかけにのみ色を見せつゝ（後撰一三二）」ナドヨメル類ノ「つゝ」是ナリ。「て」ト「つゝ」ト同シヤウニミユレトモ、「て」ハ「つゝ」ニ通ヘト、「つゝ」ハ「て」ニ通ハズ。ナニトナレハ「つゝ」ハ同時ニ交ルモノヲ、二ツニ分テ云トキ用ルガ「つゝ」ナリ。「て」ハ同時異時ニカヽハラズ、ヨリテ「て」ハ寛ク「つゝ」ハ狭シ。此例歌ニテ味フベシ。和讃テハ「弥陀名号トナヘツヽ」ノ「つゝ」此格ナリ。和讃ノ中ニハ、多ク此格ト知玉フヘシ。尓ルニ掌解等、此「ツヽ」ヲホドフル「ツヽ」ト決スルハヨカラズ。又香月院ノ如キ、「テ」ニ通フ「ツヽ」ト解シタレト、掌解・連環解等ノ行信不二ノ義ヲ難シタルヨリミレハ、「ツヽ」ヲ「テツヽ」ト決シタルハ、イ

タヅラニ本居宣長カヨダレヲナメタルノミカ。更可考。

○**な　に　ぬ　ぬる　ぬれ　ね**　此六ツ同ク畢ノ活（四ウ）ケルニテ、意ミナ同シ。「ちりにけり」ハ「散往（ニ）けり」ハ詞也。「別れぬる」ハ「別往ル」、「かへりね」ハ「帰往ネ」、「ゆきなんずれ」ハ「行往（ナン）為（スレ）」、「いりぬれば」ハ「入往（ヌレハ）」也。願ノ「な」、辞ノ「に」、不ノ「ぬ」「ね」、活語ノ「ぬる」「ぬれ」ニ乱易キトコロモアレバ、ヨク受ル処トツヽクル処トヲ味フテ定ムベシ。

○**たり　たる　たれ　たらん**　此四ツ、皆同ク「てあり」ノ活ケル也。過去ヲ現在ヨリ治定スル辞也。但シ「たらん」ハ不定ノヤウナレドモ、尚同シキナリ。法章ノ「宝ノ山ニイリテ手ヲムナシクシテカヘリタランニコトナランモノ歟」トノ玉ヘルニテモシリ易シ。「たらん」ハ「テアラウ」ト云ホドノ詞ナリ。

○**けり　ける　けれ　けらん**　「キエアリ」ノ活ケルニテ過去ヲ治定スル詞。次上ノ「たり」等ニ大方同シ。又「けり」ニ変格アリ。コレヲ推量ノ「けり」ト云。古歌ニ「ふりつみし高根のみゆき消にけり清瀧川の水の白浪（新古今二七）」トアリ。此歌ノ（五オ）「けり」是ナリ。コレヲモテミル。上ノカヽリニヨリテハ「ける」「けれ」ニモ此格アルベシ。「けらん」ニハナシ。「けらん」は「キエアラウ」ノ約リナレバナリ。

○**き　し　しか**　過去ヲ云定ムル詞ニテ、俗言ハ「た」ト云例ナリ。三ツ皆同シ。和讃ノ「タマヒニキ」「イラシメシ」「ウツリシカ」「イリシカバ」ナド、此格ナリ。「けん」ノ「け」亦此ニ同ト雖、俗言ニハ「たであらう」ト云例ナリ。受ルハ尚同シク、過去ノ詞ノ推察ナリ。但シ「よけん」「あしけん」ノ「けん」は「からう」ト譯シテ聞ユレハ、今トハ大ニ格別也。「けらし」ノ「け」ハ今ノ「けん」ニ大方同シ。俗言「たであらう」「た様子にみゆる」ナドノ意ナリ。

○**なん**　次上ノ「けん」ノ過去ヲ推察スルニ反シテ、「なん」ハ未来ヲ推察スルナリ。畢ノ「な」ニ「ん」ノ係ハリタルナリ。俗言「オハルデアラウ」ト云例ナリ。法章ノ「三途ノ大河ヲバタヽヒトリ（五ウ）コソユキナンズレ」是ナリ。第一轉ヲ受ルハ願ノ「なん」、當轉ヲウクルハ未来ヲ推察スル「なん」ナリ。又云座体言ノ格ナルトキハ、「ぞ」ニカハル「なん」ナリトシルベシ。

○**なば**　「な」ハ畢ノ「な」ナリ。「ば」ハ不定ノ「ば」ナリ。上ニ云ニ同ジ。

ながら　雅俗別ナケレバ、註ニ及バズ。

○**がて**　「不得」ノ字ノ意ニテ、俗ニ「難し」ト云ニ同ジキ也。古今四「秋はきの下葉色つく今よりや独ある人のいねがてにする（古今二二〇）」同十八「うき世には門させりともみえなくになとかわか身のいでがてにする（古今九六四）」トアル。此二首ノ哥ノ「がて」ニテ知ベシ。

○**がてら**　物するに二種ヲカヌルヲ云詞ナリ。万葉ナドニ「がてり」トヨメルモ同意ナリ。今ノ俗ニ「がてる」ト云詞アリ。是歟。サレバ「がて」ハ物二ツ合ス義ニテ、「ら」「り」「る」「れ」ハ係タル詞トオホユ。古今一「我宿の花見がてらにくる人は（六オ）ちりなんのちそ恋しかるへき（古今六六）」トアル類ノ「がてら」是也。

○**こせ**　此詞ハ四段ノ活ノ詞ナレトモ、用サマ多ク使令ナリ。又サモ

ナク受タルモ、ツヾケルモ有ナリ。万葉五「いでわか駒はやく行こせまつち山まつらん妹をゆきてはやみん（万葉三一五四）」トアリ。真淵カ万葉考ニモ「催馬楽古本、此哥ヲ由支古世ト有ハ、古訓ノ傳ハレルナリ。古世モ古曽モ同言ニテ、乞コトナリト云云」又万葉十一「われゆのちうまれん人は我ことく恋する道にあひこすなゆめ（万葉二三七五）」トアリ。コレハ乞意トモミガタキ願トモ覚ユルナリ。

○**だに**　俗ニ「のすら」ト云ホドノ詞、又云座体言ナルヲウクルハ、俗ニ「でも」「せめて」ト云ホドノ詞ナリ。此二訳ニテヨクワカル也。當轉ヲ受ルハ云座体言ノ方ナリ。

○**のみ**　俗ニ是「はかり」ト簡出ス辞ナリ。古今十五ノ詞書ニ（六ウ）「夕さりは帰りのみしける云々（古今七八四）」トアルモ「帰リ」云座体言ノ方也。

○**げ**　現在ヲ推量スル詞ナリ。俗ニ「さうも」「さうに」ナド云カ如シ。新古今三「庭の面はまたかはりぬる夕立の空さりげなくすめる月哉（新古今二六七）」トアル是ナリ。法章ノ「アリゲニ候」ト有「ゲ」是ナリ。形状言ノ轉用ノトキ、古今ニ「くれなはなげの（古今九五）」と詠ム「げ」モ同シ。予サラニ名付テ推察ノ「げ」ト云ハン。

○**あふ**　古哥ニ「天きらふ」トヨミ「くもりあひつゝ」トヨメル、ミナ同。

○**きらふ**　ハ「霧合」ノ約詞ナリ。雅俗別ナシ。

○**こそ**　上ニ出ス「こせ」ト同ク願求ノ意アリ。必當轉ヲ受ルナリ。常ノ「こそ」ノ物ヲ筒フトハ別也。物ヲ筒フ「こそ」ハ多ク云座体言ノ方ニテ、受ルト知ルヘシ。今ノ例證ヲ出サハ、万葉十三「敷嶋のやまとの国はこと霊（七オ）のたすくる国そまさきくありこそ（万葉三二六八）」トアリ。此「こそ」希願ノ意ノアルノナリ。

○**そ**　清言ニ呼例也。必上ニ「な」ノ字カヽレルカ例ナリ。「な」ハ「勿」「莫」ナドノ字ノ意ナル故ニ、万葉ニ是等ノ漢字ヲカケリ。又「そね」ト「ね」ノ添タルモ同例也。証一二ヲ出サハ、古今一「春日野はけふはなやきそ若草のつまもこもれりわれもこもれり（古今一七）」万葉七「君に似る草と見しよりわかしめし野山の浅茅人なかりそね（万葉一三四七）」トアリ。コレラノ辞ニテ味ヒタマフベシ。此余、云座体言ノ格ヲウクルハ「セリ」「セル」「セレ」「セラン」モウクルナリ。「セリ」ハ「シエアリ」ノ約語ニテ、体言ヲ受ル例也。古今序ノ「殿ツクリ」ナドノ辞、是也。又第四轉ヲ受ル詞ドモヽミナウクルナリ。今繁ケレバ略ス。更ニ云、云座体言トハ、「聖」ヲ「ヒジリ」ト訓ズルハ、四段ノ活テ（七ウ）「ヒシラ」「ヒシリ」「ヒシル」「ヒシル」「ヒシレ」「ヒシレ」ト活クヲ、并二轉ノ「ヒシリ」ニテ云座テ、体言トスルナリ。又着物ヲ「キモノ」ト訓ス活アル邊テハ、「着物」ヲ「キルモノ」ト訓ズベキナレトモ、ソハ巾、衣、蓑、笠、桐油等ニ普ク通ズ。「着」ノ字、一段ノ活ニテ、「キ」「キ」「キル」「キル」「キレ」「キヨ」ト活ヲ、第二轉ノ「キ」ニテ云座テ、物ノ体言ト合ス。コレヲ二合体言ト云。此トキハ必襟、袖等備リタル衣ニカギレリ。此「着」モ云座体言ト云モノナリ。此例甚タ多シ。枚挙スルニ遑アラズ。準知シテ可知。

第三轉之受辞

めり　らん　べき　らし　かし　と　とも　なり　な　な　まじ　てふ　べみ　べら　がに　はた　ばかり　や　よ　て　ナドノ類ナリ。

めり　める　めれ　めらん　此四ツ、皆同シ活ナリ。（八オ）俗言ニハ「様子ぢやわい」ト云程ノ詞ナリ。「めり」ハ「見エアリ」ノ約。余ハ准知スベシ。但シ「めらん」ハ「古クヨリ用ヒタルヲミズ」ト活語指南ニモ云オケリ。古今ニ「立田川もみち乱れてなかるめりわたらは錦中やたえなん（古今二八三）」トアル「めり」、此格也。述懐讃ニ「天地鬼神ヲアカムメリ」ノ「メリ」此格ナリ。「澄（スメ）リ」「工（タクメ）リ」ノ「メリ」ニ混ズベカラズ。○**らん**　俗言「であらう」。現在ヲ推察スル詞ナリ。是ニ二ツノ意アリ。上ニ「ヤ」ノ字ノカヽレルハ治定ノ格、法章ノ「人ヤアルラントオモヒテ云云」ハ「人ヤアルデアラウ、サテアル」ト決擇治定スルナリ。「花やちるらん」ナド同例也。「や」ノ字ノカヽラヌハ、疑捨テ治定セヌ格ナリ。古今ノ「久方の光のとけき春の日にしづこゝろなく花のちるらん（古今八四）」ナドノ「らん」是ナリ。此哥ニテイハヽ、「イト長閑ナル春ノ日ナルモノヲ、ナニトテ花ハ静ナル心ナク散デアラウ」ト現在ヲ（八ウ）推量スルナリ。「こそ」のカヽレルトキハ「らめ」ト結ヒ、又已然言ノトキハ「らめど」ナドヽツヽケルコトモアレト、意「らん」ニ別ナシ。又「やらん」トツヽケルハ多ク俗言ニ近クテ、尚疑テ治定セス格（ママ）ニ同シ。又「折らばやをらん」ノ類ハ一格別ニテ、宣長ハ「折ラハ折ラレヤウカ」ト云程ノコヽロトイヘリ。今モコレニヨル。

○べく　べし　べき　べけれ　べみ　べら　此六ツ、皆同ジ。大ニ分テ二類アリ。一ニ推察ノ格、二ニ教示ノ格ナリ。処由知易シ。例一二ヲ出サバ、古今二「とゝむべきものとはなしにはかなくも散花ごとにたくふ心か（古今一三二）」〔是推察ノ方ナリ〕同五「さほ山の柞の紅葉ちりぬべみ夜さへみよとてらす月影（古今二八一）」〔是亦同シ〕和讃ノ「弥陀ノ名号称スベシ」等ノ「ベシ」ハ教示ノ方也。余ハ準例シテ解スベシ。此中「べみ」ハ「べきの轉し」タル也。「べら」ハ一格アリ。近代ノ哥人ノ中ニ（九オ）古今時代ノ流言ニテ「べき」ニ同シト云人モアレト、受ル詞ノ「なり」「なる」「なれ」、自ラ変格ノヤウニ聞ユレバ、「べら」全ク「べき」ニ同シトハ云ヘカラス。変格ノ「なり」等ノコトハ下ニ云ベシ。「べく」等ノ詞ハ形状言ニテ変格ノ「なり」等ノ受ベキ処ナシ。サレバ「べら」ハ「べし」ノ轉ジタルカ。近頃ノ物ナガラ、鰒玉集ニ挙タル「とりなてし主のわかれのかなしさにはに此年さへ泣ぬべらなり」トヨメル哥ノ「テニヲハ」ヨク調ヘリ。今ヲモテ古今時代ヲ思ヤルベシ。

○らし　「らんかし」ノ約メ言ニテ、俗言「デアラウ」「サウナ」ト云意、又「サウミユル」ナドノ意。必カタヘニ証拠ヲ取リテ推察スル詞ナリ。イツモ截断言ナリ。証一二ヲ出サバ「立田河もみはなかるゝ神なひのみむろの山に時雨ふるらし（古今二八四）」〔古今五〕「ふる雪はかつそけぬらし足引の（九ウ）山の瀧つせ音増るなり（古今三一九）」同六「ぬきみたる人こそあるらし白玉の間なくもちるか袖のせはきに（古今九二三）」同十七ナドノ辞ニテ知スベシ。（ママ）

○かし　ナニニテモ物ヲ云ヒオサフル詞ナリ。「がし」ト濁音ニ呼トハ別ナリ。今ハ物ヲサシ定メテオモハシムル意ナリ。「たもとより離れて玉をつゝまめや是なんそれとうつせみんかし（古今四二五）」〔古今十物名部〕ト、うつせみの名ヲカクシテヨメル哥ノ、「かし」ノ

辞ニテ余ハオシ知ヌヘシ。

○**と**　此辞ハ至テ正直ナル仮字故、時ニトリテハ体言・用言ノ別ナク普ク受レトモ、先用言テハ、第三轉ノ詞ト使令言トヲ受ルガ大凡ノ格クナリ。「てふ」「ちふ」ハ「といふ」ノ約言、「てへ」は「といへ」ノ約語ナレハ、皆此「と」ニ同シ。「とも」「とは」「とよ」「とぞ」ナドノ類ノ「と」亦同キ也。「雖」ノ字ノ意ナル「と」亦「とも」ハ必ズ當轉ヲ受テ、普クハ受サルナリ。（十オ）但シ「雖」ノ未然言ゾ。若已然言ノトキハ第五轉ヲ受ルカ例ナリ。抑詞玉緒五ニ、十條ヲ出シテ、悉証ヲ出云々セリ。又「如」ノ意ノ「と」アリ。コレハカナラズ体言ヲ受クル例ナリ。「天地と久しき迄に万代につかへまつらん黒酒白酒（クロキシロキ）を（万葉四二七五）」〔万葉十九〕トヨメル類ノ「と」是ナリ。例イトマレナリ。「ちりぬとも香をたにのこせ梅花恋しき時の思出にせん（雖ノ未然言）（古今四八）」〔古今一〕ノ「とも」又「と」トノミ云テ、「雖」ノコヽロナルモアリ。推テ知ヌベシ。余ハ易レ知。

○**なり**　上ニ云ゴトク、此第三轉ヲ受ル「ナリ」ヲ変格ノ「ナリ」ト云。「なる」モ「なれ」モ皆截断言ニテ、連体已然ノ両義ハナキナリ。常ノ「なり」ハ五轉普ク備レル故「なら」ト活ケド、今ハ限テ「なら」トハ活カヌ也。活語指南ニ、常ノ「なり」トカハリテ「アヽ」「アレ〳〵」ト云コヽロ含メリトイヒタルゾヨキ。今亦其証ヲ挙テ詳ニセバ、「秋の野に人まつ虫の（十ウ）声すなり我かと行ていさとふらはん（古今二〇二）」〔古今四秋〕「如来ノ弘誓ニ乗スナリ」和賛「みな人は花の花（ママ）になりぬなりこけの袂よかはきたにせよ（古今八四七）」〔古今十六哀傷〕「秋風に初雁かねそ聞ゆなる誰玉章をかけて来つらん（古今二〇七）」同四「都人寐てまつらめや時鳥今そ山辺を鳴ていつなる（拾遺集一〇二）」〔拾遺二夏〕ナドノ類ニテ、和賛ニモ例多シ。但シ「なれ」ト活ケル証イマダ見ストイヘドモ、「こそ」ノカヽリアル処ヲ「なれ」ト結ベルニハ必ナクンバアヘカラズ。書ニヒロキ人コヽロヲツケ玉へ。

○**な**　「莫」「毋」ナドノ字義ニ同クテ、人ニオホスル詞ナリ。雅俗同シ。「今更に山へかへるな時鳥声の限りは我宿になけ（古今一五二）」〔古今三夏〕「恋しくはしたにをおもへ紫のねすりの衣色にいづなゆめ（古今六五二）」〔古今十一恋〕ナトノ類ナリ。和讃ノ「智眼クラシトカナシムナ」ノ「ナ」是ニ同ジ。（十一オ）

○**な**　歎ク詞ナリ。俗ニハ「アヽ」「サテモ〳〵」トウチナゲク詞ゾ。「花の色はうつりにけりないたつらに我身世にふるなかめせしまに（古今一一三）」〔古今二春〕トヨメル哥ノ「な」是ナリ。「かな」ノ「な」モ意是ニ同シ。

○**まじ**　将然言ヲ受ル「じ」ニ同ジク、俗言「マイ」ト云例ナリ。哥ニハ好マシカラズ。「まじく」「まじき」「まじう」○（ママ）「まじけれ」皆同意。スナハチ形状言ノ活ニ同ジキナリ。源氏物語桐壷「えたたふ（ママ）まじうないたまふ（云々）」〔得堪マジウ泣タマフノコヽロ也〕「まじく」ト云ヲ、「く」ヲ「う」轉ジテ詞ヲナダラカニ用ヒタマフナリ。和賛ノ「菩提ヲウマジキ」亦「有情利益ハオモウマジ」ナドノ類ナリ。俗章ニ「間敷」ト書テ「マジク」ト訓メルハ、借音ノミニテ今ノ意ト同ジ。第一轉ノ詞ヲ受ル「まし」ト混ズルコトナカレ。（十一ウ）

○**がね**　俗ニ「ヤウニ」又「タメニ」ナド云辞ニ同ジ。希求ノコヽロアリ。「がね」ト云モ同意ナリ。「桜花ちりかひくもれ老らくのこ

んといふなる道まかふがに（古今三四九）」〔古今七〕「秋津はに匂（如ノ意）へる衣われはきし君にまたさば（奉ラハ也）よるもきるがね（万葉一三〇四）」〔万葉十〕ナトノ類ニテ知ヌベシ。

○**はた**　現在ヲ云オサフル詞ナリ。漢書籍ノ「将タ」ノ字ヲ「ハタ」ト訓テ未然ニツカフトハ少シ別也。「時鳥初聲きけばあぢきなくぬしさたまらぬ恋せらるはた（古今一四三）」〔古今三夏〕トアリ。可知。

○**ばかり**　物ヲ簡出詞ニテ、雅俗同ジ。「梅の花よそなからみんわぎも子がとかむばかりの香にもこそしめ（拾遺二七）」〔拾遺集一〕「雲ゐにも通ふこゝろのおくれねはわかると人に見ゆばかりなり（古今三七八）」〔古今集八〕ナトヨメルニテ知ヌベシ。（十二オ）

○**や**　當轉ヲウクルハ、切ルヽ格ノ「や」ナリ。「鶯の笠にぬふてふ梅の花打てかざゝん老かくるやと（古今三六）」〔古今一〕「波のうつせみれは玉そみたれけるひろはゝ袖にはかなからんや（古今四二四）」〔古今十〕コレラミ疑テ云捨ル格ナリ。初ナルハ「老ノ隠モスルヤ」ト疑捨ルナリ。后ナルハ「やは」ノコヽロノ「ヤ」ニテ反語ト云テ上ニ意ノカヘテ調フルヤウニ聞ユレドヤハリ初ト同ク「はかなからんや」ハ「ハカナイデアラウ」ト云ヲツヨク疑テ捨ルノミナリ。

○**よ**　云オサフル詞ナリ。「今は我は死んよ吾妹あはずしておもひわたるはやすけくもなし（万葉二八六九）」〔万葉五〕トヨメル類ノ「よ」是ナリ。

○**て**　次上ノ第二轉ヲ受ルハ廣ク、當轉ヲ受ルハ狭シ。哥ニ訓メルハ未タキカズ。和賛ニ「有情ヲヨハフテノセタマフ」トアルノ類、是ナリ。知ヌベシ。

第四轉之受辞（十二ウ）

かな　まで　に　を　より　か　が　がも　がに　かも　がね　ば
かり　だに　さへ　すら　こと　から　のみ　ながら　ならし　な
り　なん　も　は　ぞ　や　か　こそ

○**かな**　師翁〔無蓋長臈〕ノ云、「「か」ハ疑始テ晴ルヽナリ。「な」ハ歎息（云々）」。詞玉緒ニハ「「か」に「な」の係たるなり（云々）」。世ニフキナガシノ「哉」、中ノ「哉」ナドノ説アレト、該シテ論ズレバ、タヽ歎息ノ軽重アルノミニテ、意大凡同ジ。「かも」ト云モ「か」トノミ云モ別ナシ。又「か」ノ字ヲ濁音ニ呼ハ、希求ニテ必「も」ノ字ヲ受テ「もがな」「もがも」「もが」ト云例ナリ。今ト同ジカラズ。歎息ナル証ヲ一ツ二ツ出サバ、「春やとき花やおそきときゝわかん鶯たにもなかすもある哉（古今一〇）」〔古今一春〕又同十七「あかなくにまだきも月のかくるゝか山のはにけていれすもあらなん（古今八八四）」ナドノ類也。（十三オ）

○**まで**　行末ヲカケテ限リハカル詞ニテ、雅俗オナジ。「つれもなき人をこふとて山彦の答するまでなげきつるかな（古今五二一）」〔古今十一〕ト詠ル類なり。

○**に**　上下ヲツナグ辞ナリ。其上ナル物ヲ其侭置テ下ニ運用スルナリ。時ニトリテハ「を」ニ通フアリ。又「如」ノ「に」、又「モノヲ」ト聞ユル「に」ナドアリ。「如」ノ意ナルハ和讃ノ「虚空ニシテ」ノ「ニ」是ナリ。「物ヲ」ノ意ナルハ「陸奥のしのふもしすりたれ

ゆゑにみたれんとおもふわれならなくに（古今七二四）」古今ノ「に」是ナリ。常ノ「ニ」ニ亦軽重アリ。軽キハ「衰」ノ如シ。重ハ「於」ノ意ノアル也。和賛ノ「宮殿ノウチニ五百歳」ノ「ニ」是ナリ。又「へ」ニ通フアリ。是ハ軽シ。和賛ノ「安楽浄土ニ至ルヒト」ノ「ニ」是ナリ。常ノ「ニ」トハ、「まてといふにちらてしとまるものならは何を桜におもひまさまし（古今七〇）」〔古今二〕トヨメル哥、二ツノ「に」是ナリ。（十三ウ）

○を　大凡次上ノ「に」ニ同シケレト、何ニテモ物柄ヲ手ニ取入テ云ホトノ意アルヲ別トス。又全ク「ニ」ニ通ヒテ聞ユルアリ。和讃ノ「真実明ニ帰命セヨ」ト「難思議ヲ帰命セヨ」トノ「ニ」「ヲ」是也。又「モノヲ」ノ意ノ「を」アリ。「袖ひちて結ひし水のこほれるを春立けふの風やとくらん（古今二）」〔古今一〕ノ哥ノ「を」ノ類是也。常ノ「を」ハ「年を経て花の鏡となる水はちりかゝるをや曇るといふらん（古今四四）」〔古今一〕トヨメル哥ノ「を」ノ類是也。

○より　過現ニワタリテ、限量スル詞ナリ。「昔より」ト云ヘハ過去、「今日より」又「今より后」ナト云ヘハ現在ナリ。是ニ三類アリ。一ツニ限量ノ詞「初雁のはつかに聲を聞しより中空にのみ物を思ふかな（古今四八一）」〔古今十一〕「人のこゝろ花になりにけるよりあたなる哥」同序ナドアル哥又詞ノ「より」是ナリ。二ツニ物二ツ並テ勝劣アラシムル格（十四オ）「ひとりのみなかむるよりは女郎花我住宿にうゑて見ましを（古今二三六）」〔古今四〕「時雨つゝもみつるよりも言の葉の心の秋に逢そわひしき（古今八二〇）」〔同十五〕トヨメル哥の「より」是ナリ。三ニ「故」ト聞ユル格。コレハ和賛宝章ナドニハ未タキカズ。哥ニモ希ナリ。万葉七「君に似る草とみしより我しめし野山の浅芽人なかりそね（万葉一三四七）」トアル是也。又「ゆ」「よ」ノ二字ヲ用テ、以三類ノ中ノ第一ノ限量ノ詞ニ換タルモ万葉ニハイト多シ。「田子のうらゆ打出てみれ真白にそ富士の高根に雪はふりける（万葉三一八）」ト詠ル哥ノ「ゆ」是ナリ。「よ」ハ、別オサフルトキ用ル詞ノナル有。是モ當轉ヲウクレハ、マギレ易シ。前后ノ詞ノヤウヲミテワクベシ。此云オサフル「よ」ハ東言ニ多シ。歎息ヲ含ム也。万葉十四ノ東哥ニ「武蔵野の小岫がきゝし立わかれいにしよひよりせろにあはなふよ（万葉三三七五）」トアリ。「せろ」ハ「脊」ニテ、「夫」（十四ウ）ノコトナリ。「なふ」ハ「ぬ」ニテ則「不」ノ「ぬ」也。然ハ「脊ニ不逢」ヲ云オサヘテ歎クナリ。

○か　疑始テ晴ル詞ニテ、「哉」ニ同シキハ上ニ云オハル。又疑ノ「か」アリ。「や」ノ疑ニ大凡同ジ。又「やらん」ノ意ノ「か」アリ。新古今五ノ「いつの間にもみちしぬらん山桜きのふか花のちるをゝしみし（新古今五二三）」ノ類ナリ。

○が　上ニ云ヘルハ願求ノ「が」ナリ。今ハ「の」ニ通フ「が」ナ。雅俗言同シ。證ヲ出サバ、万葉三「世の中を何にたとへん朝びらき漕にし舟の跡なきがご（万葉三五一）」ノ「が」是ナリ。「ワガ身」ノ「が」、「我等ガ今度ノ一大事云云」ノ「ガ」ナド、皆同例ナリ。

○がに　かね　意、上ノ第三轉ヲ受ルノト同シ。古今十六ノ「泣涙雨とふらなんわたり川水まさりなばかへりくるがに（古今八二九）」ノ類ナリ。三途川ノコト也（十五オ）

○ばかり　「のみ」ト云詞ニ大凡同ジ。雅俗別ナシ。古今四ニ「名にめでゝをれるばかりそ女郎花われおちにきと人に語るな（古今二三六）」

同十六ニ「露をなどあだなるものと思ひけん我身も草に置かぬ斗を（古今八六〇）」トヨメル歌ドモノ「ばかり」是ナリ。次上ノ第三轉ヲ受タルモ、体言ヲ受ルモ、大凡同意ノミ。

○**だに**　俗ニ「のすら」ト云程ノコヽロ也。又「てもせめて」ノ意有。是ハ多、体言ヲウクルナリ。今ハ「のすら」ト云方ナリ。古今一「雪とのみふるだにあるを桜花いかにちれとか風の吹らん（古今八六）」ト有。家持集ニ「吹風にちるだにをしきさほ山の紅葉かきたれしくれさへふる（家持集二六四）」ト有。中古已来、「だに」「さへ」意、通フトノミ云ヘド、必異ナルコト此哥ニテモ知ラルヽナリ。

○**さへ**　俗ニ「までも」ト云ト同ク、カタヘニ物ヲ添テ云意アリ。多ク、体言ヲウク。古今十一ニ「住の江のきしによる浪よる（十五ウ）よるさへや夢の通路人目よぐらん（古今五五九）」ト詠ル哥ノ「よる」秀句ナレバ、且ク今ノ証ニ備フルナリ。

○**こと**　古今十一ニ「おもふには忍ふることそまけにける色には出じと思ひしものを（古今五〇三）」と有。此詞、雅同シ。

○**なべ**　「並」ノ字意ナリ。故万葉ニハ、此字ヲ用ヒタリ。古今四「日くらしの鳴つるなべに日はくれぬと思ふは山の陰にそありける（古今二〇四）」トアリ。サレバ「なべ」ハ「ナラベ」ノ約言ノミ。

○**から**　「故」ト云ニ同。古今四「大方の秋くるからに我身こそ悲しきものと思ひしりぬれ（古今一八五）」トアリ。

○**のみ**　物ヲツヨク簡別スル詞ナリ。多クハ体言ヲウク。古今序ニ「しかあるのみにあらす、さゝれ石にたとへ云々」アルハ、今ノ証例ナリ。

○**ながら**　其侭ト云程ノ意アル詞ニテ、体言ヲウクルカ多シ。（十六オ）古今十五「うきなからけぬるあわともなりなゝんなかれてとだにたのまれぬ身は（古今八二七）」トアリ。可知。

○**ごと**　「如」ノ字ノ意ナリ。具ニハ「ごとく」「ごとき」「ごとけれ」ト活クナリ。古今四「秋萩も色つきぬれはきり〳〵すわかねぬごとやよるはかなしき（古今一九八）」トアル類是ナリ。

○**なり**　「にあり」の約言。「ならん」ハ「にあらん」ナリ。「なる」「なれ」皆例知スヘシ。証ヲ挙ルマデモナシ。

○**なん**　「ぞ」ニカハル言テ、全ク「ぞ」ニ同ジ。哥ニ用ルハ希ナリ。文詞ニ「なんなる」又「いへるになん」ナド用ルハ、皆此格ナリ。法章ノ「ユキナンズレ」ノ「ナン」ハ、上ノ第二轉ヲ受ル辞ノ中ニイヘリ。今ト不同ナリ。

第五轉之受辞

ば　ばや　ど　ども　や　ナドナリ。（十六ウ）

○**ば**　治定ノ格。第一轉ヲ受ノトハ、大ニ別ナリ。古今四「月みれは千々物こそ悲しけれ我身ひとつの秋にはあらねど（古今一九三）」ト詠ル「ば」是ナリ。〇ど　ハ「雖」ノ已然言ナリ。此哥ノ「ど」是也。

○**ども**　ハ具サニ云ノミ。「なれとも」「なけれども」ノ〇「とも」皆同。証ニ及バズ。

○**ばや**　「ばにや」ノ略語。第一轉ヲ受ル希求ノ「ばや」ニ混ズベカラス。古今四「久方の月の桂も秋はなほもみちすればやてりまさる

らん（古今一九四）」トアル。是例トスヘシ。「ばか」亦同意。古今五「たが為のにしきなればか秋霧のさほの山邊を立かくすらん（古今二六五）」トアルニテ知ヌベシ。

○**や**　「なれや」「あれや」「めや」ナドノ「や」是ナリ。疑ノ「や」アリ。歎息ノ「や」アリ。歌ニモアレ、文ニモアレ、物ニヨリテワクベシ。

○**と　とも**　是二ツハ、希求言ヲ受。是モ証ニ及バズ。「がし」（十七オ）是物ヲ差定テ云オサフル詞ナリ。是亦希求言ヲウク。法章ノ「アレガシトオモフ云々」トアル「ガシ」是ナリ。右ノ三言ハ、第五轉ヲ受ル辞ヲ釈スルニ因テ、是ヲ出スノミ。

体言ヲ受ル辞

○**せり**　「シエアリ」ノ約言ナリ。古今ノ「みつはよつは殿造りせり」ノ「セリ」是ナリ。○（ママ）「せらん」「せる」「せれ」ト活クハ第四轉ヲ受ル「なり」ノ活キニ同ジ。又「がに」「がね」「ごと」ノ三言ヲ除テ、第四轉ヲウクル辞ハミナウクルナリト可知。

受辞ノ大概如此。需タマフニシタガヒテ、略シテ記スコト、如此。

慶應元年仲秋中浣　越之後州　宗麟述誌

慶應二丙寅歳中夏上浣寫之畢　摂州　象外（十七ウ）

［付記］

本稿を成すにあたり、九州大学附属図書館には、資料の閲覧および翻刻掲載の許可を賜りました。ここに記して、厚く御礼申し上げます。

（ひるぬま　めい・本学専門研究員）
（かどや　たかてる・福井工業高等専門学校助教）
（ふじた　ゆうこ・本学大学院博士後期課程）
（たかす　よしのすけ・本学大学院修士課程）
（おおや　ふみ・本学大学院修士課程）